

一八八三年七月二十一日(土)

カルカッタの大通りにおける聖ラーマクリシュナと信者たち

聖ラーマクリシュナは、馬車で南神村ホツキネンシヨウのカーリー寺院を出られ、カルカッタに向かつて行かれるところである。ラームラル他、二、三の信者たちがお供をしている。馬車が寺門を出ると、モニがファズリ・マンゴー(ベンガルのマルタ地方で栽培される大型のマンゴー)の実を四個手に持つてこちらへ歩いて来るのに出合った。モニを見ると馬車は停まった。モニは馬車の台に頭をつけてごあいさつ申し上げた。

キリスト暦一八八三年七月二十一日、土曜日、アシャル黒分ついで一日、午後四時。タクールは先ず、アダルの家にお出でになり、それからジャドウ・マリツクの家、最後にケラート・ゴーシユの家にお寄りになる予定である。

聖ラーマクリシュナはモニに笑顔でこうおっしゃる。

「お前もいっしょに行こうよ。わたしらはアダルの家に行くところだ」

モニはうなずいて馬車に乗り込んだ。

モニはイギリス流の教育を受けてきたので、前世から受け継いだ力や性格(サムスカローなどというものは信じられなかったのだが、つい先日、タクールの目の前で、アダルは前世からの力でかくも熱

烈にタクールを信仰している、ということを承認してしまった。だが、帰宅してまたよく考えてみると、前世から受け継いだもの、ということがどうしても十分に納得できないのである。それで、このことについて、又、タクールにお聞きするため、今日やって来た次第であった。タクールはお話しなさる。

聖ラーマクリシュナ「ところで、おまえはアダルのことをどう思っているね？」

モニ「はい、ずいぶん熱烈な信仰家だと思っております」

聖ラーマクリシュナ「アダルもお前のこと、たいそう尊敬しているよ」

モニはしばらく黙っていたが、やがて、思い切つて、過去世からの因縁」という話題を持ち出した。

〔何も理解できない——神秘的秘密のこと〕

モニ「私は、過去世」とか前世の因縁（サムスカラ）というようなことは、どうもあまり心から信じられないのでございますが、このことが、私の信仰を何ほどか傷付けますでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「あの御方の創造では、どんなことでもあらゆることが可能だということを信じていればそれでいいよ。自分の考えていることが正しくて、他の人たちの意見は間違いだ、などとユメユメ思わないことだ。そうしていれば、そのあとはだんだんとあの御方が分からせて下さる。

あの御方の書き下す文章が、人間に理解できると思うかい？ 無限の文章なんだよ！ だから、わたしだつてこれをみんな分かるうなんてムダな努力はしない。あの御方の創造では、あらゆることが可能だと聞いている。だからわたしは、そんなことは考えないで、ただ、あの御方だけを想っている

よ。ハヌマーンに、『今日はどういう日だ』と尋ねたら、ハヌマーンは答えた——『私は日や星の吉凶のことは何も知らない。ただ一つ、ラーマだけを思っている』と。

あの御方の文章はさっぱりわからないさ！ 間近にいらつしやるあの御方が、どうしてもわからないのだ。むかし、バララーマ(クリシュナの兄)は、クリシュナが至^{かみ}聖だと覺れなかつた」

モニ「そうですね！ あなた様はビーシュマの話もなさいました」

聖ラーマクリシュナ「ハア、そうだったかな？ 何て言つたつけ、話してみてください」

モニ「ビーシュマが死の床で泣いていますと、バーンドウの兄弟たちが聖クリシュナに申しました。

『兄上、意外なことです！ 祖父はこれほどの智者でありますのに、それでも死を悲しんでお泣きなさるとは！』それを聞いたビーシュマは、こう言いました。『自分は、神の意図を何一つ理解できなかったので、それが情けなくて泣いているのだ！ なあ、クリシュナよ、君がこのバーンドウの兄弟といつもいっしょにいて、いつの時でも相談に乗り護つてくれるのに、それなのに、彼等の災難不幸は終わらないのだからね』と」

聖ラーマクリシュナ「あの御方は、マヤーですべてを包み込んでおしまいになる——何も知らせて下さらないのだ。女と金がマヤーさ。このマヤーを除^のけられる人は、あの御方を見ることができ。ある人に、このことを何とかして分かせようと苦心していたとき、突然、目の前に郷^くにの池が見えてね、一人の男が水面の浮き藻をよけて水をすくって飲んでる。水は水晶のようだった。あのサッチダーナンダがマヤーという浮き藻に覆われているから、それを除^のければ水が飲める、とあの

御方が教えて下さったのだよ。

よく聞け、お前に大変な秘密の話をしているんだよ！ ジャウ樹クラウの下で用を足しているとき見たのは——隠し部屋の戸のようなものがあってね、むろん、部屋の中はどんなだか見えない。わたしは小刀で戸に穴をあけようとしたが、うまくいかない。ほじくっていると、またすぐ埋まってしまっただ！ そうしていると突然、穴があいた！」

タクール、聖ラーマクリシュナは、この言葉のあとしばらく沈黙しておられた。やがて、再びお話をはじめられた。

「今のような話は皆、とんでもなく高い境地の話で——誰かが、わたしの口をふさいでいるような気がするよ！

神が女性の性器に宿っているのを、この目ではつきり見たよ！ 雄犬オスと雌犬メスがながっている時にも見た。

あの御方の意識が宇宙の意識なんだよ。小つちやな魚の中にもその意識がのたうち回っているのが、時々、わたしには見えるんだ！」

馬車はショババザールの十字路、ダルマハタの近くまで来た。タクールは再びお話しになる——

「時々、わたしには見えるんだよ。雨期ポルンヤに大地が一面、水浸しになっているような——そんなふうには、この意識が世界中に満ち溢れているのがね。

「だけど、こんなことが見えるからって、わたしはちっともウヌボレじゃないよ！」

モニ「あつはつはつは、アハハ……。あなた様が今さら、ウヌボレだなんて！」

聖ラーマクリシユナ「神さまに誓つて言うが、わたしはほんの少しだつてウヌボレたりはしないよ」

モニ「ギリシヤにソクラテスという名の人物がおりました。ある時、すべての人のなかにおいて、汝は最高の智者なり」という声が天からあつて——彼は独りで静かに、長いことこの啓示について想い巡らしまして結論を得ました。彼は友人たちに、「私だけが、自分は何も知らない」ということを覺つている」と言つたそうです。けれども、ほかの大ぜいの人たちは、『自分たちはよく知つてゐる』と言つてゐるのです。だが、ほんとうのことについては、すべての人が無智なのです」

聖ラーマクリシユナ「わたしは、時々思うんだが——わたしが何を知つてゐるから、こんなに大ぜい人が寄つてくるんだろう！ ヴァイシユナヴァ・チャランは大へんな学者だが、あの人がわたしにいつも言うんだよ——『あなたの言う言葉は皆、お経や聖典のなかに書いてある。それなのに、どうしてあなたのところへ来るのか知つてゐるかつて？ あなたの口からそれが聞きたくて来るんです』って」

モニ「お話しになることは全部、聖典と一致しております。ナヴァドヴィープ・ゴースワミーもあの日、パニハティでそう言つておりました。あなた様がおっしゃつた、ギーターギーターと言つてゐると、テヤーギー、テヤーギーになつていくと。実際にはターギーでなければならぬのですが、ナヴァドヴィープ・ゴースワミーが言つていましたでしょう——『テヤーギーもターギーも同じ意味で、タグという語源があり、それからターギーになつたのだ』と」

聖ラーマクリシュナ「わたしと同じような人を他に知らないかい？　学者パンディットや修行者サードのなかで、似た人がいないかね？」

モニ「神はあなた様を、ご自身でお創りになりました。ほかの人々は機械で、大量生産なさいました。法則に従ってすべてをお創りになる通りに——」

聖ラーマクリシュナ「アハハハハ、ほら、ルームラル、あんなこと言っているよ！　アハハハハハ」
タクールはとめどもなく笑っていらつしやる。終いに、やつとまたこう言われた——「ほんとに、神かけて、わたしはちつともウヌボレちやいないよ」

モニ「知識には有益なことが一つあります。これによって、私が何も知らないこと、そして、私が何もでもないことを知らせてくれることでございます」

聖ラーマクリシュナ「その通り、その通り、わたしは何でもない！　私は何でもない！　そうだ、お前は西洋の天文学を信じているかい？」

モニ「あれの法則を応用して、新しい星が発見(Discovery)できるのです。天王星(Uranus)の不規則な動きを見て、望遠鏡でよく観察しましたところ、外に新しい星(海王星/Neptune)が一つ輝いているのが分かりました。日蝕や月蝕の予報も出来ます」

聖ラーマクリシュナ「そうだろうね」

その間も馬車は進み、やがて、アダルの家の近くまで来た。タクールはモニにおつしやる——
「真実つらみを貫いていけば、神様をつかむことができますよ」

モニ「それからもう一つ、あなた様はナヴァドヴィープ・ゴースワミーにおつしゃいました。『神様！私はあなたが欲しい。どうぞ、あなたの世にも魅惑的なマヤーの豊かさのなかに、我を忘れさせないで下さい！ 私はあなた御自身がほしいのです』と」

聖ラーマクリシュナ「そうだよ、それが心の底から言えなけりや」

アダル・セン氏の家におけるキールタンの喜び

タクール、聖ラーマクリシュナは、アダルの家にお入りになった。ラームラル、校長、アダル他、数人の信者たちがアダルの応接間でタクールの傍に坐った。同じ町内から、二、三の人がタクールにお目にかかりたいと言って来ていた。ラカールの父がカルカタに住んでおり、ラカールも現在、そこに住んでいる。

聖ラーマクリシュナ、アダルに向かつて――

「誰か、ラカールに知らせなかったのかい？」

アダル「はい。あの方にお知らせしてあります」

タクールがラカールに会いたがっておられるのを見て、アダルはもう一度催促されないうちにと思つて、自分の馬車を迎えに出した。

アダルはタクールのそばに坐った。アダルは今日、タクールにお会いたくてたまらなかつたのだ。タクールが今日ここへいらつしやることは、はっきり決まっていなかつたのである。神の思召して、

タクールはいらっしゃることになったのだ。

アダル「あなた様は、しばらくここへお越しになりませんでしたね。今日、私は来て下さるよう祈っております——祈っていると涙がこぼれてしましまして——」

聖ラーマクリシュナは嬉しそうにニッコリして——

「何を言うことやら！」

夕方になった。応接間にランプがついた。タクールは手を合わせて宇宙の大実母を拝し、静かに根本真言↑マントラを念じておられるようであった。やがて、やさしい声で称名をなされた。ゴウヴィンダ、ゴウヴィンダ、サッチダーナンダ、ハリポロ！ハリポロ！その称名は、甘露の雨が降り注ぐのに似ていた！信者たちは驚いて声もなく、その神の名の甘露アムリタを味わっていた。そして、ラームラル氏が唱い始めた——

おお 世界を魅了し

シヴァさえ魅了する大実母よ

ムーラダーラの蓮の座に住みて

ヴィーナ↑を奏でる大実母よ

大いなる真言マハーマントラに属性をくくりつけ

スシユムナー、イダー、ピンガラーを震わせて

赤い六弁の蓮の花咲く恐るべき根(スワディスターナ)では 朝の調べを奏かなで

へそ(マニブーラ)では雨期の調べを

心臓(アナハタ)では夕べの調べを

喉(ウイシユッタ)では美しい調べを

眉間(アジナー)では心地よい調べを奏で

妙なるリズム、テンポ、メロディーで

三つの弦いとを震わせながら七番目の座に達し

七番目の座から飛び出していく

三つの弦——体内フアラナで氣キの流れる三つの主要な
経路ナイデー——スシユムナー、イダー、ピンガラ—
七番目の座——サハスラーラ・チャクラ

マハイマールヤ
大幻力よ 汝マールヤは幻の網で全ての存在を縛り

至高意識に溶け込んで

光を放って安座する

聖ナンダ・クマールは言う

その原理タフトラブを はつきりと知っている人などいるのだろうか？

三つの属性ググナで その黒い顔を隠しているのだから——

ラームラルはつづけて歌う――

おお バヴァーニー あなたの御名は

この世の恐れを除いてくれると聞いている

私の重荷をあなたに託し 輪廻の恐怖を除いてもらおう

おお 母よ どうか私を救っておくれ

あなたは全宇宙を持ち 全宇宙にひろがる

あなたはカーリーなのか ラーダーなのか 誰にもわからない

ここかしこ ありとあらゆるところに住む母よ

ムーラダーラの蓮に クンタリニーとして住む母よ

その上のスワディスターナに來たれ

四弁の花びらのムーラダーラにいるクンタリニー

母よ、六弁の金剛座(スワディスターナ)に來たれよ

スシムナーの道を昇つてゆけ

つぎつぎと蓮の座に住んでおくれ 女神よ

バヴァーニー――シヴァ神の妻、パールヴァ
ティーの別名

その上にあるのは甘露アメリカの泉

そこに咲くのは十二の赤い花弁はすの蓮はなの華

あなたの御足アサヒが触れたなら 蓮華はなの弁は花開き
母よ 心臓アサヒの闇は消え失うせる

その上の喉にあるのは 母アよ

青銀の十六の花びらをもつ蓮はなの華

そこは水の空間

ここに至ればすべては皆 空となる

その上の眉間には二弁の蓮花

ここで心は捕まつって

現象リウウの遊戯リウウを見ていたいと思い

二つの花びらにとどまり先に行こうとしない

その上は頭いたたまの頂

心は捕まつって——大分、上まで昇ありてきて居
心地こころがいいので、先に進すすもうとせず足踏あしみを
している

世にも麗うつくしい千の花びら開く大蓮華

そこに居るのは至高のシヴァ大神

おお 始源アライヤシヤクテイの力なる母よ 五官を支配する者よ

最高の修行者、聖者ヨルギームニらが雪山ヒマラヤの処女むすめとして想う母

シヴァ大神の傍に座し給え

シヴァシヤクテイの力 シヴァシヤクテイの力なる母よ

わたしの欲を打ち碎き この輪廻サンサーラの海に

二度と帰ってこないようにしておくれ

あなたは原初エネルギー あなたは五元素（地水火風空）

そしてまた 五元素を超えた母よ

信仰者バクタクのためにこの世サーカーラで形ある神と現れ

また五元素にとけては無形ニラーカーラとなる

〔無相のサッチダーナンダを見る——六チャクラ、音（オーム）、三昧〕

ラームラルが、

その上の喉にあるのは 母マよ

青銀の十六の花びらをもつ蓮の華はな

そこは水の空間

ここに至ればすべては皆 空となる

という歌詞のところを歌っているとき、聖ラーマクリシユナは校長に向かっておっしゃった——
「ほら、よく聞け。これが無相サツチダーナンダ(実在)を見る、ということだよ。ヴィシユッタ・チャクラの上に昇ると一切皆空だ」

校長「ハイ、よくわかりました」

聖ラーマクリシユナ「この現象の人間と世界を超えてゆけば、永遠なものに着くんだ。音を超えてナード三昧に入る。オーム、オームと称える修行を続けているうちに、音を超えて三昧になるんだ」

ジャドゥ・マリツクの家——シンハヴァーヒニーの前で——三昧境

アダルの家では、それから、タクルルに様々な果物や菓子の類を供養した。タクルルは、「今日はこれから、ジャドゥ・マリツクの家に行くんだよ」とおっしゃった。

タクルルは、ジャドゥ・マリツクの家に入られた。今日はアシャル黒分初日なので夜は明るい。その家ではシンハヴァーヒニー(ライオンに乗る女の意——ドゥルガー女神)の礼拝を永代行っていて、タクルルはその祭壇のある部屋に信者たちといっしょにお入りになった。大実母の祭壇は、花や白檀や花輪などで今まで見たこともないほど豪華に飾られていた。正面には神官が控え、灯明があかあかと燃え

ていた。お付きの者たちの一人に、タクールはお賽銭を一ルピー神前に供えるように言った。神の祀られているところに行けば、何かお供えをしなければならぬ。

タクールはシンハヴァーヒニーの前で手を合わせて立っていらつしやる。タクールの西側に信者たちも手を合わせて立っている。

タクールはずいぶん長い間、神さまを見ておられる。と、驚くべきことに、そのままやがて完全な三昧にお入りになった！石像のように微動もなさらぬ——目も動かない！

しばらく経つと、深く息を吸い込まれた。三昧が解けたのである。何か神秘的な薬に酔ったような風情でおつしやった——「大実母^マ、またね！」

しかし、その場を去られず——そのまま立っていらつしやる。

やがて、ラームラルに向かつておつしやった。

「お前、あの歌をうたってくれ。そうすれば、わたしはよくなるよ」

ラームラルは歌った——「おお、世界を魅了^マし、シヴァささえ魅了^マする大実母^マよを。

この歌は終わった。

今度はやつと、タクールは応接間の方に信者達に付き添われてお移りになる。歩きながら、時々独り言を言われた——「マー、わたしの心^ハにいておくれ、マー」

ジャドウ・マリツクは友人たちと応接間に坐っていた。タクールはまだ恍惚とされたご様子で、部屋に入られるなり歌い出された——

1883年7月21日(土)

喜びの権化である大実母^マよ

わたしを喜びから引き離さないでくれ

一八八五年三月十一日に全訳あり

歌い終えると、再び霊的興奮状態になられて、ジャドウに——「さあ旦那、次は何を歌う？ マー
よ、私は八月児か——この歌、うたおうか？」とおっしゃって、タクルはお歌いになる——

大実母^マよ 私は八月児ではない

赤い目をしてにらんでも

八月児——八ヶ月の早産で生まれた未熟児は
弱虫で臆病

私はちつとも恐くない

シヴァ大神の胸の蓮にのせた

赤紫の足は私の財産なのに

私のものを取りにいくと

何かと面倒が持ち上がる

主シヴァの証文は

ちゃんとこの胸に抱いているから

こんどは主の前に訴え出て

きつと勝訴の判決をいただく

法廷に立たされて あなたはいやでも

私がどんな子か思い知るだろう

そのときは、グルからもらった証書かきつけをもとに

ちゃんとした公文書をつくらせるよ

母と息子の訴訟ごとに

ボーツとなったラームプラサードは言う

「私を平安シャントにして抱きとってくれたら

私はあんたとのケンカをやめるよ」

興奮状態からすこしさめて、「わたしは大実母ママのお下がりか食べたい」とおっしゃった。

シンハヴァーヒーニーの供物を下げてきてタクールに差し上げた。

ジャドウ・マリツクの坐っている傍に、数人の友人が椅子に腰掛けていた。そのなかに、目に余る

追従者が何人か混じっていた。

ジャドウ・マリツクと正面に向かい合つて椅子に掛けておられるタクールは、笑いながら何かと話をなさっている。タクールの身近な信者たちの数人は次の間に、そして校長ほか、一、二の信者がタクルのお傍に坐っていた。

聖ラーマクリシユナは笑いながらジャドウにおつしやる。

「ところでお前は、どうして道化者を置いておくんだね？」

ジャドウ「はははは、道化者かもしれませんが、あなた、救つてやってくれませんか！」

聖ラーマクリシユナ「アツハツハハ、聖なるガンジスの流れも、酒瓶がびんは清められないよ！」

〔真実を貫くことと聖ラーマクリシユナ——男子の一言〕

ジャドウはタクールに、自宅でチャンディーの歌をうたう催しをすると約束していた。それからずいぶん経っているのに、歌の催しはまだしていない。

聖ラーマクリシユナ「どうしたんだい、チャンディーの歌はどうなつたんだい？」

ジャドウ「いえいえ、いろいろ用事がありましたもので、まだ出来ていません」

聖ラーマクリシユナ「何てことだ！ 男子の一言だよ！ 紳士の一言、象の牙。え？ 男の約束はそういうものだろ？」（訳註、象の牙——出たら引込まない）

ジャドウ「あつはつははは、その通りです」

聖ラーマクリシュナ「お前は抜け目のない人間だよ。何をすることも勘定高くて——バラモンの牛飼
いみたいに少なく喰わせて、沢山糞を出させて（インドでは糞を肥料、燃料に使う）、おまけに乳までドク
ドク搾る」（二回大笑い）

タクールはしばらく話した後、ジャドウにこんなことをおっしゃった——「わかったよ。お前はラー
ムジーヴァンブルの石のように、半分は暑くて、半分はひんやりとした性質だ。神様のことに
はあるが、世間のことに興味がない」

タクールは、信者たちといっしょにジャドウの家で、果物や菓子などを召し上がった。今度はケラ
ト・ゴーシユの家に行こうと予定である。

ケラト・ゴーシユの家を訪門——ヴィシユ派の人への教訓

タクール、聖ラーマクリシュナは、ケラト・ゴーシユの家にお入りになった。夜の十時ころである。
家と家を取りまいた広大な庭は、月光を浴びて明るく照らされていた。家に入りながら、タクールは
前三昧状態になられた。ラームラル、校長、および一、二の信者がお伴ともしている。広い四角形の家の
広間は、二階に上がって廊下を南にかなり行つてから、東の方に北向きにはばらく行つて突き当たり
にある。

そちらの方に行く間に、この家は住む人が少ないのに、ベランダ付きの大きな部屋が並んでいること
がわかった。

タクルを北東の一室にお坐らせしたが、まだ前三昧状態でおられる。この家の人が入ってきて、歓迎の言葉を述べた。この人はヴィシユヌ派の信者なので体にティラクの印があり、手にはハリ称名用の数珠の入った袋を持っている。相当な年寄りである。ケラート・ゴシユの親戚であった。彼は南神村にも時々タクルに面会にきていた。だが、ヴィシユヌ派の人たちの何人かは考えが偏狭だ。彼等はシャクティ派やヴェーダーンタ派の人々をひどく批難するのである。タクルはお話を始められた。

[タクルの説く万教の調和——愛の宗教(The Religion of Love)]

聖ラーマクリシュナ、ヴィシユヌ派の信者やそのほかの信者たちに——

「私の宗教は正しい、ほかの人の宗教は間違っている——こういう考えはよくないね。神様は一つで、二つはないんだ。いろいろな人があの御方にいろいろな名前をつけて呼んでいるんだよ。ある人はゴッドと呼ぶし、ある人はアッラー、ある人はクリシュナ、ある人はシヴァ、ある人はブラフマンだ。池の水を、一つの水汲場で汲んだ人はジャルと呼んでいるし、別の水汲場の人はウォーターと呼ぶし、又違う水汲場の人はパーニーと呼んでいる。ヒンドゥー教徒はジャルと呼び、イスラム教徒はパーニー、キリスト教徒はウォーターだ。でも本体は一つ、同じものだよ。考え方が道なんだ(似たベンガル語の発音を使った言葉遊び)。一つ一つの宗教の考え方が一つ一つの道——神様のところへ通じる道なんだよ。河がいろいろな方向から流れてきて、海に入っていくしよになるようなものさ。」

ヴェーダとプラナーナとタントラに明らかにされているのはただ一つ——サッチダーナンダ(サット、智慧、歓喜)宇宙の本体だ。ヴェーダではサッチダーナンダをブラフマンと呼び、プラナーナではクリシユナ、ラーマと呼び、タントラではシヴァと呼ぶ。サッチダーナンダ・ブラフマン、サッチダーナンダ・クリシユナ、サッチダーナンダ・シヴァだよ」

一同、黙然として聴いている。

ヴェシユヌ派の信者「先生、何故、神のことを考えるのでしょうか？」

〔ヴェシユヌ派の人への教訓——生ける解脱者とは？ 最上の信仰者とは？ 見神の証拠〕

聖ラーマクリシユナ「神とは何か、もしそれが分かれば、それこそ生きながら解脱した人だ。だが、みんなこれを信じていないのだ。ただ口でしゃべるだけのことだ。神は実在(いま)し、神の意志ですべてのことは起こっている、と世間の連中は聞いているだけで信じてはいない。

世間の人は、神についてどんなふう知っているとと思う？ 伯母さんたちの口ゲンカを聞いて、子供たちがけんかをしながらそのマネをして言う——あたしには神様がついてらっしゃるから——あれだよ。

全部の人があの御方を理解できると思うかい？ あの御方は善い人をお創りになる、悪い人をお創りになる、信心深い人をお創りになる、不信心な人をお創りになる、神を信じる人をお創りになる、神を信じない人をお創りになる。

あの御方のリーラー(遊戯)の場は、すべてが多種多様で不可思議だよ。あの御方の力は、ある場所には溢れるほどたくさん顕れているし、ある場所にはほんとは少なくしか顕われていない。太陽の光は地面よりも水面によく反射するし、水面より鏡にもっとよく反射する。

それから、神の信者にもいろいろある。上、中、下とあるんだ。ギターにみんな書いてあるよ」
 ヴイシユヌ派の信者「仰せの通りです」

聖ラーマクリシユナ「下の信者は、『神様はいらっしゃる。天上はるか遠くに』と言う。中の信者は、『神はすべての生物のなかに、意識として、生命として宿っていらっしゃる』と言う。上の信者は、『神ご自身があらゆるものに成っていらっしゃる。見るもの一つ一つが神の色相すがたなのだ。あの御方が現象、生きとし生けるもの、この世界すべてになつていらっしゃるのだ。神の外は何一つ存在しない』と言う」

ヴィシユヌ派の信者「そんな境地には、いったいどんな人がなれるのでしょうか？」

聖ラーマクリシユナ「あの御方を見た人でなければ、こんなふうになれないよ。それに、見た人には特徴しるしがある。時には気狂いみたいになつたり、泣いたり、踊つたり、歌つたりしている。時には子供のようになつてしまふこともある。五つの子供だ！ 素直で、正直で、虚栄心がなくて、どんなものにも執着せず、どの性格グナにも支配されず、いつもしんから楽しそうだ。また食屍鬼ビシヤウヂヤのようになつて——きれいなもの、汚いものの区別もなくなつて、いろんなしきたり(当時までのインドには、階級や宗教によつてきびしい規則があつたも、いっしょくたになつてしまふ！ 魂の抜けた白痴バカみたいに見えるこ

ともあるよ！ そうなると、どんな用事も足せないし——何をしようという気もない」

タクール、聖ラーマクリシュナは、ご自分の境涯をそれとなく言っておられるのではないだろうか？
つづけて、ヴィシヌ派の信者に向かつておっしゃる——

「あんたとあんたのもの、これが智慧だ。私と私のもの——これが無智だ。

神様よ、あんたが能動者^{カルタ}で私は受動者^{アカルタ}——これが智慧。神様、すべてみんなあんたのもの——身体も、心も、家も、家族も、ほかの生きとし生けるもの、この宇宙、世界——みんな、みんな、あんたのもの、私のものは一つもない——この理解が智慧というものだよ。無智な人はこう言う、神様は、あつち、あつち、ずーっと遠くの方に！ 智者はよく知っているよ。神様は、ここ、ここ——ほんとに近く、心のうちに、内なる導き手^{アంతルヤミ}としてあること。そして、自分で一つ一つ様々な色形^{カタチ}をとって、そこに住んでいらつしやることをね」